

# 芦田秋窓に師事した吉井秋香(菊)

西田 孝司(松原市文化財保護審議会)



秋香句碑 昭和63年7月、秋香33回忌にあたり、秋窓が座敷の襖一面に描いた俳画をのぞむ庭園内に建立された。



「秋香庵」扁額(吉井章氏蔵)昭和28年9月。芦田秋窓が古稀に際し、吉井秋香に贈った。庭に面する茶室に掛けられている。



▲芦田秋窓(前列右から3番目)と吉井秋香(前列左から2番目)昭和26～31年の間、撮影場所不明(天美東・敬恩寺/吉井章氏蔵)。

## 天美・敬恩寺で「白扇」俳画会 「秋香庵」扁額と秋香句碑の建立

明治時代の著名な俳人・正岡子規の直弟であり、大阪俳壇の重鎮として活躍した芦田秋窓が天美東八丁目の吉井山敬恩寺を度々、訪れたことから、同寺には多くの秋窓作の屏風・襖絵・短冊・扁額が蔵されています(「歴史ウォーク」142)。昭和二十四年(一九四九)、秋窓の作品を世に残すため、俳画院が結成されました。秋窓は、二十七年に俳画誌「白扇」を創刊して白扇社を興こし、多くの門弟が育ちました。俳画は、俳句とその背景を略筆の墨画や淡彩画であらわすものです。

敬恩寺は、西本願寺を本山とする浄土真宗本願寺派に属しています。室町時代の文明十八年(一四八六)ごろ、本願寺八世の蓮如が創建したと伝えられています。現本堂は江戸時代中期の明和四年(一七六七)に再建された重厚な建物です(「歴史ウォーク」141)。

秋窓は昭和二十年代以降、生家の現大阪市中央区平野町から現大阪市阿倍野区阪南町に移り住んでいました。昭和二十六年(一九五二)、敬恩寺の坊守(住職の妻)であった吉井菊が秋窓の門人となり、秋香と号し、白扇社友となりました。そこで、同寺を会場に天美や松原地域の主に女性が集い、天美句会が毎月一回、第四月曜日開催されたのです。

秋窓に師事した菊は、旧姓寺田氏。今の大阪市東淀川区東中島にある浄土真宗

本願寺派の恵光山徳蔵寺の出身でした。明治三十一年(二八九八)十月、住職の寺田崇賢の長女として生まれました。徳蔵寺には、南北朝時代、楠木正成が湊川(神戸市)で戦死しており、首級を故郷河内に持ち帰る途中、北朝方に奪われるのを恐れ、同寺に葬ったという正成首塚の五輪塔が祀られています。

菊は堂島高等女学校(のちの大手前高等女学校、現大阪府立大手前高校)を卒業し、同校OGが関わった金蘭会(現金蘭会高校)の創立に奔走した一人でした。その後、敬恩寺住職であった吉井無一に嫁いだのです。無一の父である吉井提樹は、明治六年(一八七三)に創立された天美小学校の初代校長であり、住職と教職を兼ねていました。同じように、無一も教員の道に進み、寺務と両立させていたのです。

敬恩寺には、現在、庫裏の一室を改造して茶室がつくられています。そこに「秋香庵」と書かれた扁額が掛けられています。昭和二十八年(一九五三)九月、秋窓が七十歳の古稀の時に書いたことが記されています。菊が会場としていた天美句会の部屋を秋窓が菊の雅号である「秋香」庵として贈ったものでした。時に秋香は、五十六歳でした。秋香の秋も、秋窓の一字を与えられたことが想像されます。

秋窓は、社友と各地を頻繁に吟行し、また催事を行っています。敬恩寺には場所や撮影時期はわかりませんが、「秋

香庵」扁額が書かれた昭和二十八年前後のものと思われる写真が蔵されています。そこには、秋窓と菊が他の参加者と共に見られます。背広姿の秋窓と和服姿の菊を知る貴重な一枚です。

しかし、菊は秋窓と出会って五年後の昭和三十一年(一九五六)七月十六日、五十九歳で亡くなったのです。その菊のあと、白扇の天美句会を引き継いだのが菊と無一の長男として敬恩寺を継職した吉井典章(前任職)の妻となった英子さんでした。今もお元気な英子さんは、秀風と号し、昭和三十年代半ば以降、自坊を引き続き会場に句会を催し、多くの俳画を発表しました。秋窓が昭和四十一年(一九六六)、八十三歳で亡くなった後、英子さんは平成時代に入って白扇全体の代表となったほどでした。

昭和六十三年(一九八八)七月十六日、典章前住職と英子さんは秋香の三十三回忌にあたり、秋香の代表作「山を背の庭に遊べり石叩き」と刻した句碑を自坊庭園に建てました。英子さんは、今では一線を退かれましたが、その後を継いで白扇主宰となったのも、敬恩寺近くで生まれ、今も天美にお住いの野尻紫香(節子)さんでした。

秋窓が昭和二十七年九月に第一号を発行した「白扇」誌は、令和元年十二月まで第六十八巻、第八〇五号に及びました。敬恩寺を舞台に天美の社友が、白扇の伝統を脈々と受け継いでこれらたことを誇りに思わざるを得ません。